

郷土はんのう



明治40年頃

河原町風景

名栗川の谷



田山花袋

秩父に行く路は、正丸峠を越える路と、名栗の谷を遡るものと二つある。大宮まで正丸峠の方が十里、名栗の方が十一、二里ある。子の権現はこの名栗の谷の右の山の奥に位置している。名栗の谷は即ち入間の谷である。入間川は飯能から以下で、上流は名栗川といっている。飯能を離れて、やがて、岩根橋へとかゝる。溪流がや、好い。橋を左に見て行く。右の方に森がある。中に古碑をくわえ込んだめづらしい檜の大木がある。

川に添って行くこと一里余、右に折れて行く。二の瀬橋から再び名栗川の左岸をのぼる。栗の大木が多く、夏は河鹿の声玲珂として聞える。筏の下って行くものも多い。

(大正年間刊「一日の行楽」より)

仏像余聞 井上峰次

編集者からは「飯能地方の仏像」について書くことを要請されたが、今年は教育委員会から「飯能の仏像」（仮称）の刊行が予定されているので、重複をさける意味から、この稿はよもやまばなしと夢物語で責を免れたいと思う。

その一、鉄仏はどこから

虎秀の福德寺には、もうよく知られている和様の鎌倉建築阿弥陀堂(国、重文)があり、鉄造阿弥陀三尊像が安置されている。善光寺式一光三尊の立像で、現在、三尊そろった鉄造の善光寺式如来ではただ一具のものである。この像は多くの研究者にとりあげられているが、とくに、飯能市史料編「文化財」で織戸市郎先生が、詳述されておられるので、像容についてはぜひ参照していただきたい。こゝでは、鉄仏の造像が鎌倉中・末期であるうとうという見解が、ほぼ一致していることだけを記して稿をすすめたい。

郷土史の大先輩、故井上紋次郎

先生は、かつての井上村の成立と、井上一族の来住の由来について、長い間取組んでおられた。それによると井上村の歴史は、信州須坂の井上の地に、信濃源氏の一派源頼信の三男頼季が流配されたことに始まる。頼季の子満実は、在所名をとって井上氏を名乗り、井上城に拠つてその地方を支配した豪族だといふ。これが井上氏の祖になったと。又井上紀男氏の過去帳には、その一族井上弥次郎入道源英本(井上和泉守一子とある)が、文和の頃吾那地方に来住し、本国の信濃に因んで井上村と名付けたと記してある。紋次郎先生は、過去帳の裏付けとして九件の事例、史料をあげておられるが、その適否は別として、スポットをあてたいのは、入道来住説を押し上げた、先生のユニークな推測である。

先生は生前折にふれこの推測を語り、東吾野郷土誌にも書かれた。それは、吾那井上村に来住した井上弥次郎入道が、福德寺の阿弥陀三尊を信州から奉持して、祀りこんだものではないかとする想像であった。推測と想像というより、むしろ願望であった。その根拠は、井上村に接する虎秀村にも井上姓があり、(現在井上姓は大字井上に三十一戸、大字虎秀に十一戸)福德寺は、弥次郎入道の菩提寺である興徳寺の末寺だから、福德寺阿弥陀堂に来住者が阿弥陀如来を祀ることは自然であろう、ということだ。又その含みには、善光寺式如来だから、信濃で造像され、それを奉持して来たこととすれば話が合うし、堂の建立期と年代にも大きなズレはない、という想定もあつたようだ。しかし、先生の願望なかつたこととはうらはらに、現在、信州で造られた像、信州にあつた像とは考えられない。

福德寺の鉄仏が、どこで铸造されたかを探るとしたら、二つの方法がありそう。一つは、数少ない鉄仏の分布と、铸造の地を確かめることであり、もう一つは、一光三尊の善光寺式像の様式と像の素材の検討をして

みることだと思ふ。

鉄仏の分布については、関東と名古屋付近に多いということだが、関東の中でも埼玉は遺例が多いという。飯能周辺にも福德寺像の外、赤沢円福寺の聖観音菩薩立像体幹部、都幾川村りよと山院の阿弥陀如来坐像、入間市長泉寺の不動明王坐像、等がある。このように遺例の多いことは、铸造についても県内で行われたことをうかがわせるが、これを裏付けるように、東松山市正代、同塚田、児玉町金屋等に鑄物師が定住し、造像が行われたとのことである。しかし、铸造についての事蹟を確認するまでには至っていないよう、今後の研究が俊たれる。

一光三尊の善光寺式像の様式については、前述の市史に詳しいが、信濃善光寺の本尊を換したことから、このように呼ばれると伝えられている。この本尊が秘仏で公開されなかつたためか、説話的要素が多く、ほとんど古文書、諸本によって造形の由来は述べられているようだ。それでも刀印を結ぶ等の様式は、十二世紀末からほぼ定まっております。福德寺像も例外ではない。しかも善光寺式像は、各所に作

品が多く、倉田文作先生は「鎌倉倉後期から南北朝のころが最盛期で、その製作が流行した」とさえ表現されている。信濃にとくに多い仏像ではないようだ。

善光寺式の多くは銅造で、像福德寺像のような鉄仏は稀少であるためか、材質の分析については寡聞にして知らない。铸造の場所や技法と共に、今後に俟つほかはない。ただ、鉄仏も銅仏の鑄られたところ、造像を探る途を同じにたどることによって、鉄造の解ける夢がある。

これらの背景から、福德寺像もおそらく県内で铸造されたこととみるのが、妥当ではなからうか。ところで、この阿弥陀三尊は、昭和三十一年阿弥陀堂の復元修理が終るまで、秘仏として公開されなかつた。一部の学者以外には、檀家の人達ですら直接拝むことはできなかったため、「もつたいない仏さまというだけ」ですごしてきたようだ。井上紋次郎先生は郷土史家の立場から、「信州奉持説」をもつて、これに一石を投ぜられたと考えたい。

福德寺像は、解明されない部分が多い。素材の分析を始め、铸造の場所、造像した

仏師、その技法についても手さぐりの段階を出していない。それでも、現在のところでは前述したような理由で、先生の推測を肯定することは出来ないが、それが導火線となつて、もつと明確な否定が出来たら、先生は地下で満足されることと思う。

墓石の脇に坐りこみ、古文書にうずまつた、調査の虫みたいな先生は、盆には必ず菩提寺にみえて本堂の片隅から、盂蘭盆会の回向にじつと聴き入る先生でもあつた。そんな先生と、剛い鉄仏の柔かいほ、えみを交々想いながら、鉄仏の由来がもう少し明らかになつたら、先生の墓前に報告したいと思つている。

その二、もすそのえにし

南北朝の頃より鎌倉地方の仏像彫刻のなかに、台座の下へ長く裳裾・袖衣を垂らす形式の像が造られるようになった。飛鳥仏の裳懸座形式を、関東風にアレンジした、宋風の色濃い特異なスタイルの彫像である。その多くは禅宗寺院にあるが、まれには他宗の寺院にも伝播しており、鎌倉を中心とする限られた地域だけ分布しているようだ。飯能にはこの彫像が多く、市

街地を除く地域ですでに数軀をかぞえる。

吾野 法光寺 木造 地藏菩薩像

赤沢 金錫寺 木造 宝冠釈迦如来坐像

白子 長念寺 木造 宝冠釈迦如来坐像

川寺 大光寺 木造 虚空蔵菩薩坐像

右の外に小像が若干ある。これらの像容等については、県立博物館展示解説(古美術)、市史(文化財)文化財時報等がとりあげているので、それらを参照いただきたい。

この裳裾垂下形式の像は、十四世紀から十五世紀にかけて、鎌倉の宅間ヶ谷で造られたといふことが、いくつかの裏付けにより定説になつている。法光寺像正徳三年の銘文には

佛所 若狭法眼 託磨掃部助入道浄宏とある。託磨は宅磨、宅間等の同義異語とみられ、この他の銘文や文献にもさまざまに使われている。いずれにしても宅間ヶ谷の仏所絵所に所属する仏師絵師であることをしめしたものと

言えるだろう。裳裾垂下の彫像にもいくつかのパターンがある



大光寺 虚空蔵菩薩坐像

ようだが、これらを彫り、描いた仏師達は、現在宅磨派と呼ばれている。

宅磨派系仏師の手になる垂下像の多くは、鎌倉を軸にした三〜四の都県に集中しているといふ。しかも展開する寺院が禅宗に片寄っていること、造像の場所とその年代がほぼ確かであることは、中世の資料としても確度の高いものと思われる。飯能にも中世資料はごく少ないから、

この数体の裳裾垂下像のもつ意義は大きいと思う。

そうは言つても直ちに資料になり得るかどうか、摸索するばかりである。第一に宅間ヶ谷の仏所の実体がべールに包まれたま、だ。鎌倉の浄妙寺入口を南に入ると宅間ヶ谷があり、すぐ報国寺がある。報国寺は宅間寺とも言われ、宅間法眼作と伝えられる仏像が数多くあつたといふが、明治二十三年の火災で焼失

し、今は諸本でそれを知るばかりである。鎌倉には他にも宅磨派の存在を裏付けているわけだが、この仏師の仲間の実体をしる有力な手がかりが、火難によつて断ち切られ、時の流れによつて更に滅失してしまつた。今後調査を積み重ね、英知を集めて、仏所の実体を包むべールを

なんとか脱がせてみたいものだ。裳裾垂下像が、禅寺に多い理由

も明らかでない。在銘像からみて、建長寺派の寺院に多いことは確かだが、建長寺と宅間仏所との関係はどうしても知りたいことの一つである。それは、仏像の展開を知るばかりでなく、禅宗の動向と各派の離合も、それに鎌倉支配の影響までうかがえるように思えるからだ。加えて像の素材の分析ができれば、

そのほとんどが木彫であることから、木材の調達の径路が判明するし、彫刻の技法にまで及ぶだろう。それはおのずから仏師の系譜の明解——宅磨派の実体へ迫ることになりはしないか。

飯能と鎌倉との関係をする中世資料が、かつて何れかにあつたらうか。裳裾垂下像が新しく決定的な資料になり得るかどう

か、今後の解明を俟つ以外にないが、この数体の像が果している飯能と鎌倉を結ぶパイプ役を、掘り起すことが出来ず埋もらせては惜しい。また幸にして、期待したような結果が実るとしたら、正に裳裾のとりもつ仏縁と



飯能市の

板石塔婆婆 (二)

新井清寿

古い道の草むらの中に、忘れ去られたように立てられている板碑や、墓地の片すみに、倒れかかったようにおかれている板碑を、じつと見つめてみると、何かを語りかけてくるような感じにとらわれてくる。

それは日本人が古来から受け継いできた、石に対する血がそうさせるのだらうと思ふ。

石と人間とのかかわりあいはずい昔からで、有史以前から、石は大切な生活の道具であったが、その中でも縄文時代の配石遺跡や立石などは呪術的な意味をもっていたという。これが後世道祖神や金精神のご神体と

してまつられているのもあつてもう単なる道具とも思えない。

また九州に多く見られる神籠石は、標高二三百米の丘の頂上や中腹に、切石を一列に並べた古代の遺跡で、長いものは四千米にも及ぶものもあるそうて、城壁という説もあるが、一説には霊域として、神霊を鎮めまつる神聖な土地であるとも言われている。

さらに古墳封土の上に、石に刻んだ武装人物の石人や石馬等が配列されているものもある。古墳の石室や九州、茨城の装飾古墳、近くは高松塚古墳と牧挙にいとまがない。

競つて風に靡びくように、その旗下に集つた。それは源家再興ということより、平家を滅して新しい政治体制を作り、それによって自らの所領安堵を図るためであつたらう。その願いがかなつて、鎌倉幕府が成立して、所領は安堵されるという明るい希望がもてるようになった。

ところが頼朝がなくなり、後を継いだ頼家の代となると、その希望は次々に破られるようになった。

まず頼家が最も信頼していた梶原景時が、謀反のこどがあるというこどで、正治二年(一一二〇)に駿河国におい清見関にて討たれ、所領は没収されてしまった。

続いて、將軍の義父にあたり幕府随一の権力者であつた、比

企能員も、謀反のかどで、建仁三年(一一〇三)に殺され、一族すべて北条氏によつてせめ滅されてしまった。同年に將軍頼家まで伊豆に幽閉されという事態となつて、いよいよ不安の中で、今度は、武藏の旗頭とあおがれた知勇兼備の畠山重忠まで、謀反人の汚名をきせられ、建久二年(一一〇五)二俣川において討たれてしまった。

続いて建保三年(一一二二)には、豪勇のはまれの高かつた和田義盛まで討たれるというように、幕府創立に、大きな功績のあつた人々が、次々に討たれ、所領を失うということは、いつ我が身にふりかかるかわからない不安で、所領安堵の夢も、はかないものとなつた。

このように世上騒然とした、

鰐口抄

清原恒雄

最近各地で「ふるさとを見直

す運動」が次第に芽を吹きだしている。私はたまたま寺門に生を享けた為に幼少の頃から様々な鳴らし物に接して来た。金属性のものだけでも、梵鐘、殿鐘

鑿子(大・小) 双盤、鉦子、雲板、本坪(鈴)、銚鉢(妙鉢)

銅羅、持鈴、印金、等々ある中で、その形といい、音色といい、

少年の私の興味を唆るものは鰐口であった。

境内の阿弥陀堂の前に、太い麻紐と共につり上げられた、庶身信仰の中に生まれ。そして長く大衆になじんできたもので、

時々参詣の老婆の打ち鳴らす素朴な音色には、一種の哀愁すら感ずる程であった。

その大きさは口経三十一種で銘帯には、「外・御歳、御祈禱」

「紀州村田八蔵」「全芳村」と彫刻されている。

亡父の説に依ると、その昔、安産子育の阿弥陀如来として有名

であられたこのご本尊は、請にり数度江戸に出開帳した。その時の大願成就の寄進であるとの

ことである。之を裏付けるものとして、堂の棟札には次の様な文字が発見された。(図I)

時はたまたま内外共に風雲急

をつげる時代で、露使ラックスマンが松前に来たり、將軍家齊は沿海諸侯に海防を戒しめ、内政の面に於いても老中鳥居忠意

病免、高山彦九郎自殺、林子平死歿、瑞保己一の和学講談所取

立て、老中松平定信罷免等々さわがしい中でも一般庶民の間では、平和を求め、幸福を追求する

素朴な信仰がこのように展開されていったのである。

さて鰐口とは寺島良安の「和漢三才図絵」の神祭の仏器の条に「口を裂くの形、たまたま鰐の首に似たるが故に之を名づくるか」と記してある。その昔は、

「金口、金鼓、打金、折響、打鳴」等の名で呼ばれていたよう

である。興福寺の銘文中に「金鼓仁風」とあり、今昔物語には「こんぐ」の呼び名がみられる。

現在のように鰐口を呼称されるようになったのは正応年間(鎌

倉末期)からと言われている。又の説には新羅末期に、「禁口」と呼ばれて銅羅に似たもの

があり、日本の金口、金鼓の名も、これから生じたものとも言

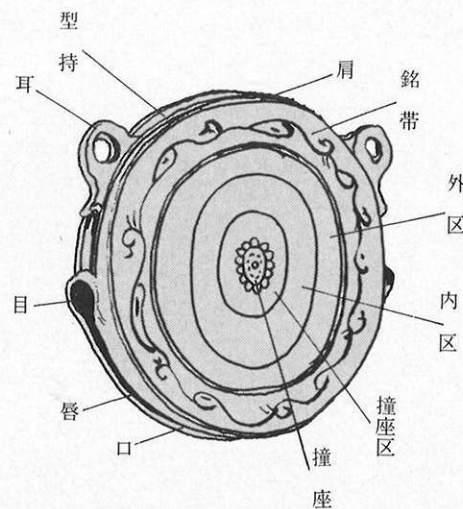
われている。当市内にも鉄製(文様鑄出し陽鑄銘)銅製(陰刻銘)など様

様の材質と銘記のものが相当数あるが、一般にはあまり関心を持たれていないのは残念である。

それらについては次回に述べることにして、形状と名称につき記すことにする。(図II)

各部の着きかたや形状により製作の時代を知ることができる。

(図II)



(図I)

紀州御殿助力奉納金有之
寛政五癸丑年

願主 江戸四ッ谷傳馬町壹丁目 蔵柱孫藤屋七兵衛 妻 りん

奉造立阿弥陀堂壹ヶ所

霜月 九日棟上
廿二日入仏

普請世話人全昌寺六世海本洩
大工 下我野長沢村
行平四郎右衛門

飯能の庚申様

平沼恒夫

道行く人々の往来や祈りを眺め、旅の安全を願ひ、諸々の祈りをはなえてくれた庚申様や路傍の石仏たち……これらも、近年の生活環境の変化や道路の改修によって、破棄され、忘れ去られようとしています。

時代や環境は変わり、願ひ事は変わっても「招福攘災」という庶民の素朴で、純粹な願望に裏付けられた祈りは、福を招き、悪霊を追い払ってくれたのだと、庚申塔を調べるにつけ、その願文はひしひしと訴えかけてくるのです。

庚申信仰は、その発生が中国にあり、日本へは奈良時代に道教と共に伝えられたといわれ、「人の腹中には三戸^{さんし}という虫がいて、人に大きな害を与える。三戸は人間を早死させようとして、常に人の罪禍を記しておき、庚申の日に天に上っていつて天帝に告げる。けれども、その晩に寝なければ、三戸は天に上ることができない。」といった三戸説が原義であるといわれたり、柳田国男は「我々の祖先が庚申

の晩に祭つて居た神様は、結局はもう不明になつていっているというより他は無い。中国にも庚申の夜を守るという風習だけはあつたが、それはただ警戒の夜といふまでであつた。睡れば三戸といふ虫が人間の身から抜け出して天に昇つて隠し事を密告するなども謂つて居たが、我邦ではそういう後暗いことは言はなかつた。我々の信仰は最も慎しみ深いもので、心と身を浄めて穢れを去り悪念に遠ざかり、一夜を神の前に参籠することによつて、団体共同の幸福が得られると思つて居たことは、仏法の教へよりも、寧ろ固有の神道の方に近かつた。(定本、第十三巻)とも論じています。

これらが、平安期の庚申の御遊、鎌倉期の庚申会、室町期の申待供養板碑などに受け継がれ、江戸期の神仏混淆の隆盛にのつて、広く庶民層や全国的な広まりをみせ庚申講等の講が生まれ、造塔が行なわれていったようです。ただ、講とはいへ厳密な教義や区別よりも、人々の

願ひは、専ら無病息災、天下奉平といった現世利益であり、土地にすがりついて生活する農林業中心の庶民の中に、招福攘災の願ひと、他の念仏講や太子講との習合は、やがて寛文延宝頃に、青面金剛が六本の腕に武器羅索、人間等を持つて邪鬼を踏みつけ、上に日月(瑞雲)足下に二

鶏、三猿(見ざる、聞かざる、言わざる)を従えた典型的なものへと発展していくようです。造立者も、講中、村中や特定主、拾七人、施主十人といった員数のみのものなど様々であり、同じく本尊も、仏教では青面金剛、神道では猿田彦大神とされながらも、庚申様は地域や人々によつて農作神、厄除け神、福神、土地神、馬や子供の守護神と受け取られるなど、これも実に様様です。

こうして路傍に禱られた塔も、次第に道標を印した文字塔や供養塔などもなり、村境の塞神や道祖神といった役割りを兼ね、庚申塚などにもなつていくようです。

現在は路傍や小祠、神社や寺の境内に禱られている庚申様も、時代や人々の種々層によつて諸諸な祈願を背負つており、庶民信仰の純粹で複雑な点を教えてくれているようです。



飯能市下畑 神明社境内庚申塔

金工師 寿親

細田栄能介

寿親を果たして郷土金工として位置付けてよいのか即断しがたいが、飯能周辺には作品が六

点と若干の古文書が現存しており、少なくとも慶応四年（一八六八）頃から明治十七年（一八八四）までの一時期は年記のある作品からも、飯能に住んでいたことは確実と思われる。

寿親の作品は、飯能地方の双木家所蔵、藤枝太郎英義打刀の拵の鐔や井上家所蔵の香炉などが著名であるが、寿親は、当時この双木家の貸家にいたといわれ、双木家文書には「我等前に、借家前能刀脇差彫物師に東龍齋寿の弟子にて寿親と申す名人有之、考齋とも名乗る。幼年の頃は寿昌と申し、当明治二巳年に三十七才」とある。（「飯能郷土史」四百七十四頁）。

「幼少の頃は寿昌と申し」とあるが、この銘の作品が市内新井家に残っており、やはり寿親の若い頃の作品と伝えられている。四分一地に竹と虎を肉合彫りにした短力の一作拵で、所伝が正しいとすれば、慶応四年以

前から飯能へ来ていたと思われる。

その他に、鐔、縁頭を小柄をはじめ、香炉、香合、靈芝の置物の他に鉄砲（刀剣美術第二百一十一号十七頁）もあり、材料は、鉄素銅、したん等を使用している。

確認されている在飯最後の作品は、現在、市内井上家所蔵の明治十七年作の香炉があり、これもやはり市内旧家、小能家の依頼で作ったものである。

更に、同時代の飯能の刀工、小林英道とも交流があったと思われる。正確な時期は不明であるが、近くの研師落合房次郎の養子になったといわれている。飯能刀剣研究会が戦前に編集した「刀匠小林英道」には「寿親が鉄材に文字を彫るのは、川越の和尚様が筆紙に文字を書くよりも速い」などの記述が残っている。前述、井上家の香炉も、岩座は英道が作ったとされている。小林家には、英道が愛用したという寿親作の角兵衛獅子の緒締が残っていることなどからも、

英道を通じて他の英義一門の刀工とも関係があったと思われる。

若山泡沫「刀装小道具講座」

第三巻、百八十七頁に東龍齋の門人が列記されているが、なかに広瀬寿親の名が見える。又、「金工事典」では、金工土屋国親の娘婿となり江戸袖止ヶ浦に住んだとある。飯能では、以前の姓は不明であるが、落合姓とされている、

「晩年は、千葉県野田の娘の縁家、山岸三三郎方に遊び、そこで明治十五年、五十六才であった」と「刀匠小林英道」にあるが、寿親については不明な点が多い。

以上が、今日まで調査した寿親の資料のアウトラインです。なお、作品、資料等をお持ちの方がございましたら、是非御連絡下さい。

(21—2600)



市史編さん室 だより

お知らせ

当会では、昭和五十四年度の会員を募集しております。

会員には、郷土にふさわしい資料を紹介、配布しておりますので是非ご入会下さいませようご案内申し上げます。

入会申し込みは事務局にお申し込み下さい。

※年会費 千円

編集後記

本会誌の第二号を編集する内に、著者の郷土に寄せる愛執の深さに改めて触れた喜びを噛み締めて居ります。

皆様のご感想や各分野からのご寄稿を頂ければ幸いです。

事務局

飯能市立公民館内

赤田健一 二一三六七八

飯能市史編さん室内

浅見徳男 三二八二五八

飯能市本町八一九

岡野達雄

発行所 飯能郷土史研究会

飯能市仲町二八一—

飯能市中央公民館内

代表 加藤 一

印刷所 コバヤシ印刷

飯能市大河原一八七

☎ 三二七五三九

みなさまのご講読を期待しております。

なお、これからも「民俗」「行政」「産業」などの編を発売していく予定です。資料の提供や内容へのご指示等一層のご協力、ご指導をおねがい申し上げます。

(浅見記)